

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。すなわちこれ諸仏称揚の願と名づけ、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく。また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

(「行巻」 聖典一五七頁)

大行とは、
すなわち無碍光如来の名を
称するなり

第5組 天正寺住職

嶋地 正孝

Text by Shoko Shimachi

今年5月に大成寺老僧、武田昭龍さんが浄土に還帰されました。老僧がその少し前にお寺の伝道掲示板に「尊厳死という言葉はよく聞くが、尊厳生と聞かぬことは不思議だ。生まれて、こうして生きている。それを尊厳と感じられぬのが悲しい。」と書かれていました。「南無阿弥陀仏」が老僧の老病死の身から叫び出た言葉なのでしょう。親鸞聖人は「行巻」の標挙に「諸仏称名の願」を挙げられます。私自身の念仏の歩みがいつ、どこから始まったか考えてみますと、やはりお寺にお参りに来て下さった御門徒の称名念仏からであります。決して私から始まったのではありません。その意味で称名とは単に名を称える個人の体験ではなく、具体的な時代、社会、生き様にまでなって私達に用くものなのです。私達は先達の言葉を通して、理解できる人になるのではなく、『大経』で阿難が釈尊のお姿を通して自らに用いている本願に出遇われたように、言葉にまでなってこの身に現れ出ようとするものに出遇い、そして生きていくことを願われているのです。

「大行」とは本願の現行であると言われます。その行は真実の現行でありま

す。親鸞聖人は『浄土和讃』の「真実」の言葉に、「真というは偽り諂わぬを真という。実というはかならずもの実となるをいうなり（原文仮名）」と左訓されました。どんなに立派な真実でも、この身の事実とならなければ絵空事になってしまいます。その事実とは「二種深信」のほかにはありません。この身にまでなった法蔵菩薩の願心に、この身を賜っていく、自らが法蔵菩薩の永劫修行の歴史の中に見い出され、この身に起こってくる願往生心を讃嘆するのです。

ある学習会で先輩僧侶が挨拶されて、「苦しい事は私達にとって苦です。しかし私達にとって楽しいことも苦です。一切皆苦であります。」と言われました。いつも私が善でありたい。思い通り生きたい。その思いと身の事実が一致しません。その根にある問題は私達が「業縁存在」つまり、宿業因縁の道理によって今、ここにあるという事です。『歎異抄』には「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべ」き身とあり、この身は私にまでなってきたいのちの歴史の事実なのです。理知・理性から見れば、この環境の中に、このような身を持って放り出されたのはすべて偶然であります。そして、身と心を持ったという事は理知・理性では解決できない問題を持って生まれてきたという事です。そのことに気づかず、理知・理性によって解決しようとする事を親鸞聖人は「智愚の毒」と言われます。「貴賤・縞素を簡び、男女・老少を言い、造罪の多少を問い、修行の久近を論」じます。しかし、「如来誓願の薬は、よく智愚の毒を滅するなり」と教えられます。理知・理性を破って、「あなたがどんなふうに思っても、我ここにあり」と一切群生海を荷負して、宿業の大地に立って叫ばれているのです。（願往生心）その叫びをこの身に聞く時、問題を解決するのではなく、問題を荷負する者として歩み出されるのです。

清澤満之は「我が信念」に「その無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、すなわち如来である。」と言われます。他との比較で無能と言われているわけではありません。本当に憑^{たの}むべきものが見つかった時、無能なるままに生きていけるということです。それは「自分はもう大丈夫」ということではなく、生涯、分別に振り回される事を縁として、はからずも「南無」の歴史に参加させていただいた喜びなのです。大行に私の「南無」が問われています。